

1971年から1995の25年間の観測資料を基に水温値の生起頻度分布を調べると、この海域での水温値の分布が非常に歪んでいることが見出された。すなわち、 0°C 以下の水温の出現が無く、分布形状において低温側ではシャープなカットオフが現れる。高温側では稀にはあるが純粋な黒潮系海水の侵入があって、300 m層の分布は高温値には $m+9\sigma$ 付近まで連続的に延びている (m : 平均, σ : 標準偏差)。この純粋な黒潮水の出現は、解析した期間に4回あった。その内の3例は、海洋速報などの資料から、黒潮続流から切離された大暖水塊が西進し沿岸域まで達した時に生じたもので、他の一例は黒潮続流の最も沿岸よりの蛇行の振幅が異常に大きくなり、黒潮水がこの海域に直接流入した時に生じていた。このい

ずれの場合にも、暖水塊の構造は深く数百メートルに達している。また、水平スケールも大きく、岩手県水産技術センターの東西観測線の4本全てに同様に見られた。この4例が生じた年を除いた各月の平均水温・塩分場では、観測範囲の南東端に黒潮系水が現れ易い傾向が見られる。その構造も深い、200 m以深ではかなり変質を受けているようで、津軽暖流水に近い特性を示している。

参考文献

永田 豊・鍵本 崇・轡田邦夫・高杉 知・石田享一、1993. 北太平洋中層水の起源としての高塩の津軽暖流水。月刊海洋 25: 128-134.

「大槌シンポジウム」を振り返って —北方海域研究に果たした役割—

花 輪 公 雄

東北大学大学院理学研究科

1981年12月に第1回「大槌シンポジウム」が開催されて以来、2000年度に20回目を迎えた。これを機会に、大槌シンポジウムの過去を振り返り、シンポジウムが果たしてきた役割を考えてみたい。

この間(1-19回)、48の機関から延べ700名以上の参加者があり、300題以上の講演があった。大槌臨海研究センター報告に掲載された論文や講演要旨の著者数も、185名にのぼる。学会や他のシンポジウムとは異なり、若い学生・院生、あるいは現業に携わる人達へ、気軽な研究発表の機会を与え続けてきた功績は極めて大きいものである。

また、シンポジウムで発表された論文は、海洋気象学会機関誌「海と空」や、月刊海洋に何度も特集が組まれて印刷されており、海洋のコミュニティでは、単に「大槌シンポジウム」と書いただけでこのシンポジウムを指すまでになった。また、この間走っていた多くの大型プロジェクト研究と同期して歩み、また、プロジェクト研究の課題を先取りしてテーマを選んできていたと言える。

大槌シンポジウムの今後はどうなるのだろうか、あるいはどうすべきなのだろうか。まず、大槌シンポジウムは「サロン」に徹してよいのであろう。大槌シンポジ

ウムはこれまで通り、「北の海」の研究に興味を持った人達が集い、各人の研究の進展を紹介し、情報を交換し、切磋琢磨し、懇親する機会と割り切ったかどうか。さらにテーマは、今まで通りグローバルな視点を持ちつつも、「北の海」を対象としてテーマを設定し続けることは意味があると考え。規模もここ大槌臨海研究センターが会場場所として適切な大きさを保てばいいのではなかろうか。日程の長期化、参加者の増加は、分裂に繋がる。しかし、サロンではあっても、参加者以外、海洋のコミュニティへの積極的な情報発信も必要であり、それには、可能な機会を利用して印刷物として活字化する努力が、これまでのように必要であり、かつ重要である。そのためには、これまでそうであったようにコンビナーを適切に選ぶことが一番かもしれない。コンビナーには2年間、ボランティアでの労力を強いることになるが、新しい視点、新しい参加者を得るには一番である。程度の制約は覚悟してもらおうものの、コンビナーにはその中で自由にやって頂いたら良いのではなかろうか。すなわち、今後も大槌臨海研究センターという「地の利」を得て、拡大路線を取らずに、「北の海」に興味を持つ人達が定期的に集まり続けることが重要と考える。